

留学先	中国（広東省広州市）
留学期間	2019年9月～2020年1月末まで ※コロナウイルスのため1ヶ月早期帰国
実習先	広州市内にある小学校（日本人学校ではない、現地の学校）
留学テーマ	中国の小学校教育を理解する

## 1. トビタテ！留学 JAPAN での留学

### 2 回目の留学

私は今回の留学で2回目の留学であった。1回目は学部2年次での中国の留学である。今回の留学先も前回と同様、中国への留学であった。

2回目の留学を希望した理由は、中国の小学校をじっくり見てみたいという思いがあったからである。1回目の留学中から、通訳として中国の学校を訪問する機会があった。私が拠点を置いていたのは、中国南部の広東省であった。訪問は、北部の遼寧省瀋陽市から北京、上海を含む多くの都市の学校を回ってきた。しかし、悔しい思いをしたことがいくつかあった。

- ・通訳をしているため、疑問点等についてなかなか質問できない
- ・滞在期間が短く、長期に渡る学校の変化が見えない
- ・訪問に来ることが分かっているため、学校が“準備をして”待っている

つまり、中国の学校を深く理解すること、そして、中国の学校の日常について理解することに課題があった。

また、一般的な留学奨学金では、海外の大学における研究留学や交換留学が支給の条件とされており、今回の私のような「実習」が主体となる留学は支援の対象にならない。しかし、トビタテは実践活動（私の場合は、小学校における実習）を重視している。その点が私に合っていた。今回の留学では、大学や研究機関での学修活動は行わず、留学期間のほとんどを実習先の小学校で過ごした。

### 留学におけるリスク

留学と聞くと、海外で学修活動を行う、語学が伸びる・・・などポジティブなイメージがあるだろうか？それとも、海外で生活するなんて危ない、犯罪に巻き込まれそう・・・などネガティブなイメージがあるだろうか？

今回の留学で香港デモと新型コロナウイルスの蔓延の2つを経験した。これらはどちらも留学前には想定していなかったリスクである。また、その兆候も見られなかった。留学に行くということは、それなりにリスクを伴う行為であることを理解しておかなければならない。日本とは違う環境で過ごすことは成長できる貴重な機会だ。しかし、その一方で、自分自身でリスクマネジメントを行い、無事に日本に帰ってくるのが一番大切である。

## トビタテコミュニティの強さ

留学中にトビタテコミュニティの強さを実感した出来事がいくつかある。

### 【事例 1】教育分野におけるテクノロジーの活用について知りたいとき

研究の一環で、「教育分野における ICT などのテクノロジーの活用状況について知りたい」と考えたとき、私はすぐにトビタテの仲間のことを思い出した。トビタテの壮行会などで一緒に過ごしていた友達が、まさにこのテーマでアメリカに留学していた。私はすぐに彼に連絡を取り、いろいろなことを教えてもらった。さらに、彼の指導担当の先生まで紹介してもらい、他大学の先生から意見をもらう機会も得ることができた。

トビタテは様々な分野から様々な国に留学している。それだけではなく、それぞれのトビタテ生の特性をオープンにしているため、困ったときに頼る相手を探しやすい。そのようにしてトビタテ生同士が繋がり、さらにネットワークを強固にしていくことができる。

### 【事例 2】新型コロナウイルスの感染拡大を受けて退避を検討していたとき

トビタテ 11 期生と先に留学していた 10 期生の中国組は、新型コロナウイルスの影響が深刻になってきたとき、WeChat（微信）で連絡を取り合った。当時は新型コロナウイルスの影響が中国国内にとどまり、さらにウイルスそれ自体についてもまだよくわかっていなかった時期である。中国にいと身の危険を感じ、どこにいても感染するのではないかという恐怖があった。そのような状況の中で、それぞれのトビタテ生が各大学に問い合わせを行い、お互いの情報を交換した。あるメンバーは直接文部科学省に働きかけ、中国組への柔軟な対応をお願いした。それが現在のヨーロッパ組への対応にもつながっていると考えている。

## 2. 新しい時代を生きる子ども育む中国の教育実践

### 教科担任制をとる中国の小学校

中国は小学校から教科担任制をとっている。それは子どもに専門性の高い授業を行うためである。また、授業のほぼ全てが PowerPoint を使って行われる。日本の黒板に授業内容をまとめていくスタイルとは大きく異なっている。ただし、教室中に黒板が設置されていない訳ではない。私の実習先の小学校では、ホワイトボードが用意されていた。

私の実習先の学校は、中国の各省・各自治区等と比べても一人当たり GDP の高い広東省にある学校である。その上、広東省の中でもさらにレベルの高い学校である。その前提があるにせよ、実習先の英語教師の授業を受けた子どもたちは、4 技能を自分のものにし、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」学ぶレベルに達している。教育学研究科の先生が視察に来たときに一緒に参観した授業では、中国の伝統文化であるドラゴンボートをテーマとし、中国と欧米におけるドラゴンに対するイメージの違いについて学習した。この文化の違いについて考えたことは、ワークシートに英語「で」まとめ、英語「で」発表する。教師も英語「で」授業をする。日本の小学校教師は学級担任制であり、一概に比較はできないが、日本の先生が参観すると必ず度肝を抜かれることになる。

算数の授業でも、「1 億を知る」という学習単元では、1 億という日常生活では馴染みのない大きさの数について、自分で 1 つの単位を決め、それを 1 億集めたときの数の大きさで理解をする形式が採られていた。学習内容のまとめの授業ではあったが、子どもたちは調べたこと、考えたことをポスターにまとめたり、PowerPoint にまとめたりしていた。

## 各教科をつなげて学ぶ“総合性学習”の実践

実習先の学校は定期的に日本の学校を見学し、日本の教育実践から多くのことを学んでいる。新潟大学附属新潟小学校や新潟大学附属長岡校園（幼稚園・小学校・中学校）の研究会にも複数回参加している。教科担任制では、各教科の専門性を高めることには非常に有効である。教師は特定の教科について研究をし、同じ内容の授業を複数回繰り返すため、授業の質を上げることができる。

しかしその一方で、子どもたちの学びがぶつ切りになってしまうことに課題があった。本来の学びは教科の枠組みで分けられるものではなく、授業をする便宜上分けられているものだからである。

実習先の学校では、各学年であるテーマを決め、そのテーマに基づいて各教科からアプローチし学びを深めていく学習活動が行われていた。中国が伝統的にもっている教育のよさと新しい時代に向けて総合的な力を育む上で先駆的な実践をしている日本の教育のよさとを組み合わせた実践であった。

## 学校と保護者の関わり

私が特に注目したのは、学校が保護者という人的な資源を豊富に取り入れているところである。前述した総合性学習では、専門分野で活躍されている保護者が講師となって授業をしていた。

学級会で「いじめ」についてディベートしたときには弁護士の保護者、企業を経営している保護者を招き、参加して意見をもらった。

文化祭では子どもの衣装作成、活動の運営、活動への出演など保護者が主体となって動く場面が見受けられた。とにかく学校の学習活動の規模は日本のそれとは桁外れに違っている。その分職員の数も多いのだが、それでも職員だけでは到底成し遂げられない、実施できないレベルの質と規模である。保護者の専門的な知識や学校への手厚いサポートがなければなし得ないものであった。

しかし、保護者の学校に対して求めるものは高く、学校とりわけ学級担任の先生はプレッシャーを感じている。校長先生に学校と保護者の関わりについて尋ねたことがあった。校長先生が言うには、「保護者がクレームや要望を伝えてくると言うことは、学校に期待をしているときである。もっと学校をよくしたいと思って伝えてきてくれる。そういった意味で、保護者と対立するのではなく、保護者の持つエネルギーを学校で活用させてもらうことが大切だ。」といった趣旨の内容を教えてもらった。

日本でも“モンスターペアレント”と言うことがあるが、事情は中国でも同じである。しかし、彼らを学校の味方できるように取り組む姿勢が大切だと学んだ。

## 3. 最後に

今回、私はトビタテ！留学 JAPAN の 11 期生として中国に留学した。トビタテでの留学は事前事後研修が充実しており、個人的には非常に大きな魅力であった。また、トビタテでつながる仲間はこれからの日本を支える人たちばかりである。同じ期のメンバーはもちろん、同じ国に留学しているメンバー、同じ新潟からトビタテに採用されたメンバー、ひいては 1 期生からのメンバー全員とつながることができる。私が感じているトビタテの大きな魅力である。

留学に行くことは先に述べたようにリスクがある。しかし、それ以上に自分の社会認識を広げる一番手っ取り早い行動である。普段生活している「当たり前だと思っていた環境」を変えると、見える世界が変わる。ぜひ、世界に出ていき自分の世界を広げてほしい。



1. 南奥実験学校で校内研修を担当したときの様子



2. 南奥実験学校で校内研修を担当したときの様子



3. 南奥実験学校の文化祭の様子